

上原 美術館 通信

No.
11

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2020年9月25日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



本展は、伊豆の仏教美術から、通常非公開のもの、一般に知られていないものを中心に、十数点を厳選して展示します。

伊豆には沢山の温泉地がありますが、とりわけ著名なのは熱海です。古く熱海の地は、各所に熱泉が噴出し、草木が生えない温泉地独特の荒涼とした景観が広がり、鎌倉時代成立の『地蔵菩薩靈驗記』はこの景観を見て「熱海は炎熱地獄の先端」とし、亡者が責め苛まれる地獄であったと記しています。熱海の背後にそびえる日金山は、これらの亡者を救済する地蔵菩薩の住処とされ、この山の登り口に、中世から存在したのが土沢地蔵堂です。本展ではこの地蔵堂の本尊である等身大の地蔵菩薩像(写真1)を展示します。本像は熱海市指定文化財ですが、土沢地蔵堂へのアクセスが難しく、また個人が管理するお堂であることなどから、あまり知られていない仏像。本像が堂外で公開されるのは本展が初です。

同じく堂外初公開となるのが、伊東市宇佐美地区の浜崎家に伝えられた毘沙門天像(写真2)です。南北朝～室町時代の像と考えられ、豊臣方の武将だった浜崎家の祖先が、大坂城が落城して逃れる際、本像を背負って当地に逃れたと伝えられる像です。本像は伊東市の文化財指定を受けている唯一の仏像ですが、やはり個人が祀るお像であるため拝観が難しく、地元の方や研究者以外には知られざる仏像です。

河津町谷津地区の南禅寺は、山中の不便な地にある普通の規模の寺院でありながら、26体の平安仏が伝えられてきた謎の寺です。本展では、この寺の多くの仏像の中から、すらりとした立ち姿と、流麗な衣文が美しい2体の等身大の菩薩像を選び、展示いたします。南禅寺の仏像・神像の多くは、9～10世紀と、12世紀の2つの時期に集中して造像されており、この時期活発化していた伊豆諸島の火山活動を鎮める祈りが込められている可能性があります。

また、本展では古写経や仏画、仏具もご紹介いたします。南伊豆町伊豆地区の普照寺に伝えられた大般若経は、南北朝時代にさかのぼる伊豆を代表する古写経の一つですが、その奥書に記された書写地に「伊浜郷」「岩殿」「岩科郷」「安良里郷」など伊豆の地名が見られます。これは今から700年近く前、すでにこれらの地名が存在していたことを示すもので、その史料価値から静岡県指定文化財となっています。

仏画としては、涅槃図5点を展示します。涅槃図とは釈尊がこの世を去る場面を描く絵画で、横たわる釈尊の周囲に、沢山の弟子や神々、動物までが集まり、嘆き悲しむさまを描きます。大画面に極彩色を用いて描かれた群像は迫力がありますが、



写真1 《地蔵菩薩像》熱海市・土沢地蔵堂蔵 熱海市指定文化財



写真2 《毘沙門天像》室町時代 伊東市・個人蔵 伊東市指定文化財



写真3 《笈》室町時代 河津町・普門院蔵 静岡県指定文化財

所蔵する寺院の関係者以外は見ることができないものです。

河津町逆川地区の普門院に伝来した笈(現在のリュックサックのようなもの)は、室町時代の15世紀後半、普門院を開いた模庵宗範が、この地に背負ってきたものとされ、静岡県の指定文化財となっています(写真3)。実用品である笈は破損しやすく、後世に残ることが少ないため、中世の笈は貴重な文化財ですが、通常非公開であり、文化財関係の書籍にもほとんど紹介されていません。知られざる伊豆の仏教美術の代表格と言ってもよいでしょう。この機会にぜひご覧ください。(田島)

本展では新収蔵初公開となる鍋木清方《十一月の雨》(図1)を中心に、上原コレクションから日本画に描かれた四季の情景をご紹介します。今回ご覧いただく作品は季節ごとの草花といった自然の風物を描いたものから、人々の暮らしを季節感とともに捉えたものまで様々です。中でも、下町に生きた庶民の生活に対して、鋭敏に季節を感じ取っていたのは日本画家・鍋木清方(1878-1972年)でした。

鍋木清方は、江戸の文化が色濃く残る明治初め、東京神田に生まれました。13歳で日本画家の水野年方(みずのとしかた)に入門し、新聞小説の挿絵を描く仕事から画業をスタートさせます。挿絵で培った情趣を巧みに表現する手法で、代表作《築地明石町》(1927年、東京国立近代美術館蔵)などの美人画や、《朝夕安居》(1948年、鎌倉市鍋木清方記念美術館蔵)といった風俗画を描きました。晩年は東京を離れ鎌倉に暮らした清方ですが、自分がかつて暮らした東京下町の風情を、その思い出とともにたびたび取り上げています。

《十一月の雨》もまた、初冬の雨に濡れる下町の情景が表情豊かに描かれています。舞台となる下町の通りには芋を焼く煙が流れ、シトシトと降る時雨に柳の枝が濡れています。傘を差した女性は、荷車の花の鮮やかさに目を留めたのか、振り返って微笑みを浮かべるようです。その向こうには冬になると店を出し始める焼芋屋が支度をして、あたりには芋の甘い香りが立ちこめています。小路を挟んで隣家には絵草紙の下、男性が書物を読み耽っています。こうした人々の仕草ひとつひとつが画面に息づき、劇中の何気ないワンシーンを切り取ったような雰囲気を感じさせています。清方はこの作品について「焼芋屋の店も今では見かけなくなったが、銀杏の葉が黄いろく落ちる頃、灰色に時雨るゝ巷にたなびく煙、芋の焼けるにほひ、隣りの絵双紙屋と共に愛すべき明治の庶民に生活の喜びをあたへた忘れ難いものであった」と、振り返っています。初冬ならではの生活描写とともに、雨の日の潤んだ空気感が繊細に捉えられ、画家の愛した下町の情景が浮かび上がります。



図1 鍋木清方《十一月の雨》1955(昭和30)年 新収蔵・初公開 上原美術館蔵 ©Akio Nemoto 2020 / JAA2000128



図2 竹内栖鳳《海濱小暑》1927(昭和2)年

本展では、そのほか初雪に微笑む女性を描いた上村松園《初雪》や、春霞に煙る山桜を篝火が照らし出す横山大観《夜桜》、ひなびた漁村の夏を爽やかに描いた竹内栖鳳《海濱小暑》(図2)などを展示いたします。四季に彩られた日本の情景の数々をお楽しみください。(齊藤)

涅槃図は、仏教を開いた釈迦如来が入滅されたという2月もしくは3月の15日頃に行われる、涅槃会という法要で懸けられます。法要の時のみ公開されるので、通常は年1回しか拝観できません。特別展「知られざる伊豆の仏教美術」では、伊豆に伝わる江戸時代の涅槃図5点を一堂に展示いたします。

涅槃図は、多くが2メートル四方ほどの大型の絵で、中央には今まさに入滅しようという横たわる釈迦、その周囲には歎き悲しむ菩薩や神々、僧侶や信者、そして動物たちを描きます。基本的な

構図は同じため、どの図も似たようなものに見えるかもしれません。実際には人物の配置や動物の種類など、細かな点で違いがあります。今回は展示している南伊豆町手石・青龍寺に伝わる涅槃図(享保4年/1719)をもとにご紹介したいと思います。

本図は縦にやや長い画面で、中央の釈迦を取り囲むように、樹木と参集する人々が描かれています。この木は『平家物語』の冒頭で有名な沙羅双樹。釈迦は跋提河という河のほとり、沙羅双樹の林の中で入滅したと伝えられる

ため、木立の奥には河の波間がみえています。上空には満月と、天界に住まう釈迦の生母である摩耶夫人が、息子である釈迦入滅の場に慌てて駆けつけてくる場面が描かれます。

画面下方には、生きとし生けるものすべてが悲しんだ、ということで、さまざまな動物たちが登場しています。決まって描かれるのは白象や、青い水玉模様の表皮をした獅子などですが、不思議な動物が登場するときもあります。よく見られるのは、牛のような姿で背に甲羅をつけ、角を一本はやした動物。これはサイをあらわしています。江戸時代には、ほとんど実際のサイを見たことがなかったので、このような不思議な姿であらわされたのでしょう。青龍寺本では画面左下隅、左から2番目の小さな動物がサイのようです。また鳥も多く登場しますが、必ず描かれるのは、上半身が人で、下半身が鳥の姿をした迦陵頻伽という鳥です(青龍寺本では白象の上)。この鳥は浄土に住まい、美しい声で歌うと言われています。

涅槃図を見るとき楽しみの一つは、こうした動物たちの種類や表現でしょう。絵師によっては、鳥を描くのが得意だったのか、たくさんの種類の鳥を描いたものや、ムカデ、ミミズや蟻、バッタなど、虫をたくさん描いたものもあります。青龍寺本は、鳥や動物が多く、虫は蝶が一匹だけ確認できます。本図を描いた絵師は、あまり虫を描くのが、好みではなかったのかもしれませんが。

本展では、青龍寺本のほかに4幅の涅槃図をご紹介します。それぞれの参集する人々の表情や、動物たちの描かれ方にも注目してご覧ください。



《涅槃図》享保4(1719)年 南伊豆町手石・青龍寺蔵

10月10日より開催の展覧会「四季の情景—上原コレクションを楽しむ」では、新収蔵の鍋木清方《十一月の雨》を展示いたします(作品図版は本号3ページに掲載)。今回、調査のため『鍋木清方と江戸の風情』展の図録(2014年、千葉市美術館)を閲覧している際に、《十一月の雨》の下絵が掲載されているのに気がきました(図1)。下絵には完成作にも登場する花売りが描かれていましたが、背景や他の人物などは大きく異なっています。これは完成作とどういった関係があるのか、どのような場面を描いたものなのかなど、多くの疑問が湧き、さらに調査を進めました。

当館にある鍋木清方関連の図書・図録を調べたものの、他にこの下絵を掲載したものは見当たりませんでした。そこで、所蔵先の鎌倉市鍋木清方記念美術館にお尋ねしてみると、図1の画像とともに背景に土塀が描かれていることなどを教えていただきました。さらに、同美術館には、先ほどの図録には掲載されていない、もう一枚の下絵(図2)があることも知らせてくださいました。画家が完成まで何枚下絵を描き、どのように構想が変化したかなどは、今後調査が必要ですが、今明らかになっている下絵をみていくだけでも、画家が

試行錯誤しながら制作していた様子が窺えます。

ここで2枚の下絵を見てみましょう。図1は、描かれたモチーフを詳しく調べていくと、明治時代に見られた四角いポスト、そこへ手紙を出すような仕草をしている女性、その後ろには小窓のついた建物がある点などから、郵便局のある街角が舞台であると推測されます。次に花売りの男性は、完成作と同じように荷車を引いていますが、図1では荷車に男性の足下が隠れています。清方もこの男性や荷車の描写は色々試みたようで、墨線と朱線で何度も書き直した跡がみられます。完成作では荷車を描くスペースを広めに取って男性と重ならないようにし、雨に濡れる男性の背中と鮮やかな花々の対比がより明確になっています。建物の垣根の上には、葉を散らした柿の木のようなものが描かれていることから、完成作と同じく冬にさしかかった季節を想定しているように思われます。

次に図2を見ると、こちらでは女性が花売りから草花を買っているようです。画面右端には大変薄く外灯らしきものが描かれていることから、こちらの下絵も舞台はどこかの街角と推測されます。女性の布をくわえる口元や、

すらりと伸びた指などは大変艶やかで、髪は島田髷を結っているように見えます。花売りが草花を選び分けている荷台には剪定鋏が置かれており、下絵でも細部にまで気を配っていた様子が窺えます。男性はススキのような植物を手にしており、地面には落ち葉が描かれていることから、図1と同様に下絵の段階で完成作と同じ初冬の場面をイメージしながら描いているようです。

一見するとこれらの下絵に描かれた場面や人物のポーズなどは、あまり完成作と似ていないように見えますが、それらをじっくり見ていくと、傘を差した女性、花売り、季節など、完成作と共通した要素が見つかります。こうした共通点をもちつつも、作者は様々なアイデアや工夫を試みながら、下絵を足がかりとしつつ、作品の構想をまとめ上げていきます。完成作以前のアイデアが記録された下絵からは、画家が試行錯誤した跡をみることで



左より、図1 鍋木清方《十一月の雨》下絵1 1955(昭和30)年 鎌倉市鍋木清方記念美術館蔵、
図2 鍋木清方《十一月の雨》下絵2 1955(昭和30)年 鎌倉市鍋木清方記念美術館蔵 ©Akio Nemoto 2020 / JAA2000128

ここでご紹介した2枚の下絵は鎌倉市鍋木清方記念美術館に収蔵されています。同美術館は鍋木清方の旧居跡に建てられ、1年を通して清方作品と出会う美術館です。

実技4講座・仏教美術講座の再開

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、3月より当館開催の日本画教室、デッサン・水彩画教室、仏像彫刻教室、写経教室、仏教美術講座は中止していましたが、7月より再開しました。参加者の皆様や先生には入場時の体調確認書の記入、こまめな手指消毒をお願いし、会場では換気をこまめに実施。適宜、机や備品の消毒を行っています。

実技講座のうち3つの教室は今年2月に改築したアトリエにて実施する予定でしたが、机の配置などを考慮して、現在はデッサン・水彩画教室をアトリエで(写真上・中央)、その他の講座を近代館会議室(写真下:写経教室)で実施しております。今後も感染拡大防止に最大限の注意を払いながら、教室の運営に努めてまいります。

調査報告

4月6日、河津町の小峰堂、天神社、薬師堂の調査を行いました。本調査にて約一年にわたる河津町内の寺院、堂宇の悉皆調査を完了しました。一連の調査では、南北朝時代の仏師朝栄による唯一の作例となる地蔵菩薩像(林際寺)のほか、後世の修理が施された平安時代の釈迦如来像(栖足寺)など、多くの新発見がありました。

6月26日には伊東市池の龍溪院調査(写真)を実施、7月3日には熱海市教育委員会の依頼により熱海市土沢地蔵堂の調査を行いました。これらの調査で発見された龍溪院の涅槃図(写真)、土沢地蔵堂の地蔵菩薩像(熱海市指定文化財)は、秋の特別展『知られざる伊豆の仏教美術』(2020年10月10日～2021年1月11日)にて展示予定です。

講演ほか

7月15日、田島整主任学芸員が下田市・寿大学の本年度開校式にて講演を行いました。「阿弥陀如来と極楽浄土の美術」と題して、下田市にある阿弥陀如来像を紹介しながら、その思想と美術を紹介しました。下田市民文化会館にて開催されましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、800名収容の大ホールにて50名が聴講しました。8月5日には、同学芸員が伊東市文化財保護審議会に参加し、文化財活用地の現状を視察しました。

その他

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、毎月第3土曜日に開催しておりましたギャラリートークは当面の間中止とさせていただきます。展示会の内容につきましては、当館Webサイトにて動画解説をご紹介します。ぜひご覧いただけましたら幸いです。



8月24日、上原美術館のアトリエと近代館会議室を会場として、文化財の写真撮影に関するハンズオン・セミナーが開催されました。主催は国内外で文化財の保存・調査研究活動を行っている東京文化財研究所です。

この企画は、静岡県博物館協会の後援、当館協力のもと、県内の美術館・博物館職員と自治体の文化財担当者を対象に募集を行い、当日は熱海から浜松まで県内全域から11名の参加者が集まりました。

セミナーは午前・午後の二部制で実施され、午前中は座学、午後は撮影実習を行いました。はじめに、当館から田島整主任学芸員が、普段行っている寺院での悉皆調査のようすを紹介し、撮影対象の多さや、明るさ、スペースが十分に取れないことなど調査現場における文化財撮影の難しさを報告しました。次に、各参加者より、日常感じている写真撮影についての課題を話していただき、全員で共有しました。それを受けて、東京文化財研究所の城野誠治専門職員から、「文化財写真で大切なこと」という題で発表がありました。その内容はカメラやレンズの基本的な機能の話から、照明によって被写体の見え方が大きく変わることなど多岐に渡り、参加者の疑問に丁寧に答えていきました。

午後は上原美術館の絵画や仏像を対象として撮影実習を行いました。実習では、それぞれ異なる性質をもつ被写体として、額装された油絵、軸装の日本画、金色に塗られた仏像の3種類を撮影しました。参加者は普段業務に使用しているカメラと三脚を持参し、作品の撮影を通じて、お互いに疑問点や課題などを共有しつつ解決方法を探っていきました。会場には照明機材としてクリップオンストロボが用意され、ライトの置き場所や被写体に対する照射角度などについて具体的な説明がありました。例えば、仏像では「プレーンライト」と呼ばれる、上部から斜め45度の光を当てる基本的な照明のやり方が紹介されたほか、掛軸では画面の記録したい要素によって光の角度を変えていく重要性が強調されました。実際にライトを当ててその違いを体験した参加者からは、「撮影、光の使い方、とても参考になりました。基本の技術まで教えて下さり、大変ありがたいと思いました」といった声が聞かれました。

当館としても、他の組織と協力しながら文化財の記録や保護に関わる活動ができたことは大変有意義でした。今後も継続的にこうした取り組みを続けつつ、文化財の保護に関わっていきたくと考えています。(齊藤)



おうちでぬりえを楽しもう

本年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、残念ながら夏休みの子ども向けワークショップの開催を見送りました。その代わりにしまして、当館Webサイトにて、『おうちでぬりえを楽しもう』を掲載しております。初級編のルノワール《横になった婦人》のほか、中級編の岸田劉生《麗子微笑像》、ルドン《花瓶の花》、上級編として安井曾太郎《焼岳(上高地晩秋図)》のぬりえをご用意しております。ぜひダウンロードしてお楽しみください。



Webサイトのリニューアル

美術館のコンテンツをより楽しんでいただくため、Webサイトをリニューアルしました。Web上で『上原美術館通信』をお読みいただけるほか、仏像ギャラリーの解説冊子『仏像のみかた』もご覧いただけます。また、作品ごとの解説動画も少しずつ充実させていく予定です。



伊豆だより



新型コロナウイルス感染症の影響が今なお世界中に広がっています。伊豆下田では下田太鼓祭りが中止となり、いつもは海水浴シーズンで賑わう国道も静かです。このような状況でも、山や海はいつもと変わらず夏の太陽が輝き、人々の生活サイクルとは異なる大きな自然の時間が流れています(写真は8月の美術館裏山からの眺めです)。

美術館業界では展覧会の中止が相次ぎました。当館から貸出を予定していた5つの展覧会が中止や延期となりました。美術館の企画展は担当者が何年もかけて企画、交渉、準備を続けてようやく実現します。開催直前で中止となった展覧会担当者の方々の気持ちを思うと残念でなりません、積み重ねられた準備はいつか新たな展覧会となって再生すると信じております。当館でも秋の特別展の開催について検討を重ねましたが、このような時期にこそ多くの方に美術や文化に触れていただきたいと考え、実施に向けて奔走しています。本展では伊豆半島各地の寺院より貴重な仏像や涅槃図、写経を出品いただく予定です。展覧会の場が一期一会であることを改めて感じながら準備を進めております。(土森)

おすすめの書籍



安井裕雄『図説 モネ「睡蓮」の世界』(創元社、2020年)

モネにとっての「睡蓮」とは何だったのか。それは自明のようでありながら、モネ芸術の根源に迫る困難な問いです。その大きな問いに挑むのが4月に刊行されたばかりのこの書籍です。本書ではモネが描いた全ての「睡蓮」の図版が収められ、ジュエルニーに庭を造り始めた頃から、晩年の大装飾画に至るまでを視覚的に辿ることができます。30年以上に及ぶその制作を概観すると、後半生を捧げたモネの模索と格闘が垣間見るとともに、一人の画家の内面を越えゆく芸術の誕生に立ちあうことができます。本書を読んだ後、「モネはひとつの目にすぎない。しかし何という眼だろう！」というセザンヌの言葉が心に浮かびます。モネ芸術の本質が平易な文章で解説されているほか、図版はダニエル・ウィルデンスタインによるカタログレゾネ番号に対応しており、学術的にも重要な文献です。現在、箱根のポーラ美術館では『モネとマティス—もうひとつの楽園』(11月3日まで、当館より2点出品中)が開催されています。本書と合わせて、モネの「水の庭」を楽しむまたとない機会になりそうです。

(土森)

次回休館日は2020年9月28日(月)～10月9日(金)です(展示替えのため)